

紀要

- 石器製作からみた矢柄研磨器という道具…………… 重田 勉 (1)
- 近江湖西地域の土師器
—古墳時代中期から後期にかけて—…………… 籠尾 拓幸 (7)
- 滋賀県内出土の須恵器貯蔵器1
—古墳時代中期を中心に—…………… 高島 悠希 (13)
- 志賀・中村狐塚古墳測量調査報告…………… 辻川 哲朗・福井 知樹 (24)
- 犬上川右岸における集落の変遷
—彦根市福満遺跡を中心として—…………… 中川 治美 (37)
- 高島郡出土の底部糸切り土師器に関する基礎的研究
—「皿化」についての一考察—…………… 川嶋 泰輔 (51)
- 中世観音正寺の中心伽藍について
—観音寺城と観音正寺その(4)—…………… 伊庭 功 (61)
- 近江地域の近世銭貨…………… 森田 真由香 (70)

38

中世観音正寺の中心伽藍について

— 観音寺城と観音正寺 その（４） —

伊庭 功

目次

1. はじめに
2. 問題の所在
3. 『桑実寺縁起絵巻』に描かれた寺院境内
4. 『絵巻』の観音正寺伽藍と“伝三井邸跡”
5. おわりに

— 論文要旨 —

史跡観音寺城跡は近江守護佐々木六角氏が居城とした山城であり、全国で最大級の規模を持つとともに、戦国時代の総石垣の山城として知られてきた。この城跡の遺構群には、現在も城跡内に所在する観音正寺の、中世に築かれた平坦地の遺構が含まれているという議論がある。本稿はこの見解に与する立場から、『桑実寺縁起絵巻』に描かれた二つの寺院の絵のうち、一つは中世の観音正寺のものであることを美術史家の亀井若菜の議論に拠りながら説明した。そしてそこに描かれた鎮守社の基壇は、観音寺城跡の中にある伝三井邸跡と呼ばれる平坦地に遺存する基壇を描いたものであることを考証して、ここが中世に観音正寺中心伽藍が所在した場所であることを主張する。この議論を通じて、観音寺城跡とされる遺構群には、中世観音正寺の中心伽藍が所在した敷地のほか、その坊院があった敷地の遺構などが多数含まれるという見解について、その妥当性を強調しようとするものである。

——— キーワード

戦国時代 観音寺城 観音正寺 桑実寺 桑実寺縁起絵巻 中世山城 中世山寺

1. はじめに

筆者はこれまでに観音寺城跡に関する考察をおこなってきた（伊庭 2010、2011、2014）が、本稿はその続編に位置づけられるものであり、趣旨としては 2011 年に公表した論考（伊庭 2011）（以下、前稿とする）の内容を補足するものである。

前稿では、織山山頂から南側斜面に分布する観音寺城跡の遺構群には中世観音正寺の遺構が含まれているとする藤岡英礼の推論（藤岡 2005）に賛同し、同じ織山の西側中腹に所在する桑実寺に奉納された『桑実寺縁起絵巻』に関する亀井若菜の論考（亀井 2003）に依拠して、戦国時代末期までの観音正寺中心伽藍は観音寺城跡の中の“伝三井邸跡”と通称される平坦地（曲輪）に存在した、と推定した。ただ、前稿の趣旨は、観音寺城跡の遺構群には中世観音正寺の遺構が含まれるという藤岡の推論について、独自に検討した内容を説明することに主眼を置いたため、中世観音正寺の中心伽藍の位置についての考証は説明不足であった。今回はこの不足を補うものである。ただ、趣旨としては前稿と変わらない部分が多いため、内容的に重複する点が多いことはご寛容願いたい。

2. 問題の所在

観音寺城跡は安土城以前の中世山城でありながら、城内の曲輪に極めて多数の石垣を積んでおり、近世城郭において特殊に発展した城石垣の端緒をなす遺跡として注目されてきた。ただ、その城郭の構造は戦の砦としての山城のなかにあって特異であるとされてきた。観音寺城跡の全体を正確かつ詳細に記述した村田修三は、その特異点を次のような 3 点にまとめている（村田 1991）。すなわち、一つは山頂とそれに続く尾根部分に曲輪がないこと。二つ目は密接した曲輪群の多くが縦横に連絡しあって碁盤目状に配置されていること。三つ目は、一つ目ともかわるが、伝本丸跡をはじめとする主要三曲輪が西端に偏っており、曲輪群の分布や配列から見たときの城の中心を定めにくいことである。そのほかにも、先に述べた石垣を多用していることや、主郭部のない山頂から東方に延びる尾根には曲輪が配列されていないばかりか、「大土塁」と呼ばれる巨大な削り出し土塁が築かれていることなどが指摘されている。この大土塁は、造作の規模が大きい割に防御上の効果には疑問が提起されるなど、通常山城としては不可解と感じられると指摘されてきたところである。

そうしたなかで藤岡英礼は、観音寺城跡とされてきた遺構群の中には観音正寺に由来する寺院遺構が含まれていると指摘した（藤岡 2005）。上記に紹介した観音寺城跡の特異であると指摘されてきた部分は、藤岡がいうようにこれが寺院に由来するものと考えれば素直に理解できるものが多い。筆者も藤岡らが滋賀県内ですすめてきた山寺遺跡の調査（栗東市教育委員会・財団法人栗東市文化体育事業団

2004、2005、2008、愛東町教育委員会 2003、伊吹町教育委員会 1986、用田 2009）に依拠して、藤岡の見解を支持するものである。そして筆者は、寺が伝える戦国末期に山麓へ移転したという伝承が観音正寺の建物・仏像・地元伝承などと整合していることから、その伝承が事実であった蓋然性が高いこと（伊庭 2010）、そして現在の観音正寺境内は江戸時代初期に造成され、移転先から現在地に復興されたものであることを明らかにし、移転前の中世観音正寺の中心伽藍は現在地とは別の場所にあったと考えた（伊庭 2011）。藤岡が示唆したように、観音寺城跡の一部（伝進藤邸跡、伝後藤邸跡と呼ばれる曲輪群の一带など）が戦国時代以前に形成された観音正寺の坊院跡であったとすると、それ相応の場所（つまり碁盤目状に配列された平坦地の間を上方へ直線的に伸びる参道の突き当り）に中世観音正寺の中心伽藍が存在しなくてはならない。このことについて筆者は、美術史家の亀井若菜の所論にしたがって、桑実寺が所蔵する『桑実寺縁起絵巻』（以下、『絵巻』と略す）に描かれた 2 つの寺院伽藍の一つが当時の観音正寺を描いたものであるとする説を支持し、「伝三井邸跡」とされる平坦地（曲輪）がその場所であると考えた。その場所の比定については、『絵巻』に描かれた寺院境内に見える細長く、L 字形に曲折する基壇が、伝三井邸跡に残されている逆 L 字形に曲折した基壇に一致するであろうことを傍証にあげた（伊庭 2011）。今回はこのことについてより詳しく説明することにしたい。

本稿の検討においては、まず『絵巻』の絵の一部は写実性を持って制作されているという亀井の主張を紹介し、同絵巻に描かれた桑実寺境内と現在の同寺境内を比較して、絵巻に描かれた桑実寺のどういった部分が現実に即して描かれているかを説明する（1）。そしてこの作業の結果を前提として、絵巻に描かれたもう一つの寺院、亀井はこれを中世観音正寺の主要伽藍を描いた場面と推定しているのだが、これも桑実寺境内の場合と同様に写實的に描かれていると想定し、ここに描かれた内容を現地のようすと比較することによって、その場面が観音寺城跡にある平坦地の一つ、つまり伝三井邸跡と呼ばれる場所を描いたものであり、かつてそこにあったが今は失われてしまった伽藍のようすを描いている可能性が高いことを説明する。

3. 『桑実寺縁起絵巻』に描かれた寺院境内

（1）『桑実寺縁起絵巻』について

『桑実寺縁起絵巻』（2）は、京を追われた將軍足利義晴が六角定頼を頼って桑実寺に身を寄せた時に、義晴が発願して土佐光茂らに制作を依頼し、天文元年（1532）に桑実寺に奉納したものである。桑実寺は六角氏が居城とした観音寺城の所在する織山の西側谷筋の中腹に位置する寺院であるから、義晴は六角氏の庇護のもとにあった。

亀井若菜は、絵巻の奥書や貴族の日記によって判明する

表1 『桑実寺縁起絵巻』の構成

上巻	第一段	第二段	第三段	第四段
	桑の巨木、 <u>寺院の境内</u> （イ）が描かれている。	大津宮の宮中に臥せる阿閑皇女。	天智天皇が定恵和尚を宮中に招く。	定恵和尚に法会を営ませると、湖に薬師如来が顕現した。仏身が発する光明に照らされたところ、皇女の病は癒えた。
下巻	第一段	第二段		第三段
	薬師如来は湖を渡り、岸から馬に乗って桑実山の瑠璃石まで登って馬を降りた。その地には <u>堂舎</u> を建て、 <u>定恵和尚が落慶法会を営んだ</u> （ロ）。	即位した元明天皇は桑実寺に行幸し、瑠璃石の仏足跡を参拝した。その下には <u>桑実寺の境内</u> （ハ）が描かれている。		日光・月光菩薩と神将、眷属が化驗し、本尊薬師如来を守った。

『絵巻』制作の経緯や事情をもとに、『絵巻』に書かれた内容や構図、結果としてそれらで表現されたものを、当時の歴史的文脈においてさまざまな視点から解き明かし、『絵巻』の制作を発願・奉納した義晴、絵師の土佐光茂、義晴と六角定頼との関係など、『絵巻』にかかわった当時の人々を登場人物とする歴史模様を浮き彫りにしている。亀井が論文で言及した事柄は多岐にわたるが、ここでは本稿の関心に関係する『絵巻』に描かれた2つの寺院境内の描写について検討する。この2つの寺院境内というのは、一つは後述のとおり桑実寺を描いたもので間違いなく、もう一つは当時の観音正寺を描いていると考えられる。

この説明に入る前に、まずは『絵巻』の詞書と絵の構成、そこに記された桑実寺の縁起の物語を紹介しておこう。

物語は天智天皇が大津宮に在宮した時代にはじまる。天智天皇の第二皇女阿閑皇女が病に伏せていたところ、経を唱える声が湖から聴こえてくる夢を見た（第二段）。天智天皇が定恵和尚にこの夢について問うたところ、薬師如来の瑞相が現れたのだらうと判じた（第三段）。さっそく天智天皇が定恵に法会を営ませたところ、湖から薬師如来が光を放って化現し、その光を浴びた阿閑皇女はたちまち快癒した（第四段、以上上巻）。

化現した薬師如来は白牛に乗って湖を渡り、岸で白馬に乗り換えて水田の広がる平野を進み、桑実山（叡山）の瑠璃石で馬を降りた。白鳳六年、天武天皇はこの地に桑実寺を建立し、この地に降り立った薬師如来を安置して定恵和尚に法会を営ませた（第一段）。時が経って阿閑皇女が即位すると（元明天皇）、かつて病をいやしてくれた薬師如来に参拝するため桑実寺へ行幸した（第二段、以上下巻）。

物語は以上のとおりであるが、絵巻には物語の筋とはやや離れた内容をプロローグとして上巻第一段、エピローグとして下巻第三段が加えられている。

『絵巻』の詞書と絵の構成は表1のとおりである。上下巻の各段には詞書と絵がセットになっている。上巻よりも一段少ない下巻では、その分だけ第一段と第二段（とくに第一段）に長大な絵が展開されている。薬師如来が湖から

桑実山の瑠璃石まで移動したようすを描き出して、桑実寺が創建されるきっかけとなった伝説の中心部分を描写しているのが下巻第一段である。本稿で検討する寺院境内の絵の一つは、これに続く第二段に描かれている。第一段では桑実山（叡山）に創建された桑実寺で最初の法会が営まれたようすが描かれており（ロ）、第二段では元明天皇が即位してから、病を癒してくれた薬師如来＝桑実寺に行幸するようすが描かれている（ハ）。その構図は第一段に描かれた場面のうち、山麓から桑実寺境内を経て瑠璃石までとほぼ同じ情景で、その数十年後のようすを描く形になっている。この場面に描かれた寺院境内が桑実寺であることは、描かれた堂塔の配置や敷地のようすが現在の桑実寺とほぼ同じであることから、疑う余地がない。このことについては、あとで詳しく検討する。

『絵巻』に描かれたもう一つの寺院は、上巻第一段にある。この場面に描かれているのは、桑の巨木から落ちた実の一つが桑実山（叡山）となったという伝説にもとづいて桑の巨木が描かれ、その隣に寺院境内が描かれている（イ）。本稿が参考にしている『続日本絵巻大成』13（中央公論社1982）と『続日本の絵巻』24（中央公論社1992）では、いずれもこの寺院を桑実寺としているが、堂塔の配置が現在の桑実寺とはまったく異なるので桑実寺ではない。また『絵巻』を検討した亀井は、この第一段の詞書では桑実寺と観音正寺の二寺の由来を同等同列に扱っており、描かれたのが桑実寺でないのであるから、上巻第一段に描かれたこの伽藍は観音正寺であろう、としている。ここに描かれた伽藍がどの寺院を描いたものか、筆者には該当しそうな寺院が思い浮かばなかった。三重塔が現存する滋賀県内の寺院に、この絵のように堂宇を配置した寺院は存在しない。したがってすでに堂塔が失われてしまった寺院か、あるいは想像で描かれた架空の寺院である可能性も排除できないと思われた。しかしいろいろと検討していくと、この場面に描かれているのは戦国時代まで存在した中世観音正寺の中心伽藍であると確信するに至った。このことは最後に説明する。

（２）『絵巻』に描かれた桑実寺の境内

では、『絵巻』は実際に現実を忠実に描いているのだろうか。寺院が自らの由来を明らかにするために制作した絵巻であれば、創建時の寺院の景色など知る人のいない昔のことを絵にするわけだから、適当にフィクションを交えて壮麗に描いておいても構わない。寺院の縁起絵巻とはそういう類のものであり、絵巻とは絵の壮麗さによってみる人を納得させるものとして描かれているかもしれない。上巻第一段の寺院は架空の寺院が描かれた可能性を排除できないと筆者に思わせたのは、そんな考えからであった。しかし亀井は、この『絵巻』のある部分は写實的に、少なくともそこに描かれたものの現実を見たことのある人なら、それがどこから見たときの何を描いているかが確実にわかる程度に写實的に描かれていることを、この『絵巻』の制作を発願した足利義晴の意図、当時の義晴を取り巻く政治状況と、結果として絵画に表現されてしまった当時の無意識の思惑などまでカバーして、『絵巻』を総合的に解説することによって説明された。その説明の導きとして、亀井は論文の最初に、下巻第一段において水田遠方の山並みまでを見晴らした場面について考察している。亀井の論文にしたがって、『絵巻』がどのように現実を写實的に描いているかということについて所論を追っていこう。

下巻の第一段は、薬師如来が湖上から湖岸まで飛来し、馬で巖山まで至る場面を、水田を近景、山々を遠景とした景色を背景に展開している。ここに描かれた景色は湖岸から山裾までの水田地帯を描写しているのだが、その水田は地形の微妙な起伏とともに表現されており、「小高い場所から実際の田圃を観察したような一種科学的といえる描写」（３）と解説される表現となっている。亀井によれば、水田をこうした表現で描き表わした例は同時代にはないという。『絵巻』のこの場面は、こうした描写を行うことによって高い場所から俯瞰していることを表現し、実際にこの描かれた場面が桑実寺の裏の尾根にある岩（それは、桑実寺境内から薬師如来が到着した場所と伝わる瑠璃石に至る途中にある）から望んだ景色であることを、同じ景色を見てきた人にはすぐに理解できるように描かれている、という。そのことによって、この景色に重ねて描かれた薬師如来の化現に現実感を持たせる効果がもたらされている。

このように、『絵巻』に描かれた桑実寺とその周辺の描写は、そこを訪れた人にはそれがどこから見たときのどの場所を描いたものかがわかるほどに写實的に描かれていた。そこに、桑実寺の縁起にかかわる天智・元明両天皇の物語を重ね描くことによって、義晴が寄寓するこの地が天皇とゆかりのある地であること、つまり本来であれば天皇が住まう中心地である京と比べて劣らないほどの中心地であることを、『絵巻』というフィクションにおいて実感させる効果をもたらししている。亀井の議論は、こうした描写に加えて、願主である義晴の立場や願望を踏まえてさらに

広がりのある議論を展開している。『絵巻』は桑実寺の縁起に関する物語の挿絵として描かれたものではなく、義晴をめぐる厳しい現実に対してそれを打開したいという願主の願望を容れてその理念が表現されたものであった。その意味で『絵巻』の桑実寺とその周辺にかかわる部分は、現実を映した表現でなくてはならなかったのである。

以上のような描写が行われている第一段に続き、元明天皇が桑実寺へ行幸する場面が描かれる第二段には、『絵巻』が奉納された当時の桑実寺境内が描かれている。物語上は奈良時代のことなのだが、絵巻に描かれた桑実寺は天文元年の直前のようなすを描いたはずで、その描写もやはり相当に写實的である。

現在の桑実寺には、重要文化財に指定された室町時代後期建立とされる本堂が残されている。つまり、『絵巻』に描かれた桑実寺本堂は現存の本堂が描かれていることになる。この本堂は昭和 57 年～60 年の解体修理によって、江戸時代に行われた改修から元に復した姿に復元されているが、『絵巻』に描かれた本堂とは異なる部分もある。たとえば、『絵巻』では屋根が寄棟で梁行は 5 間に描かれているが、現在の本堂は入母屋で梁行は 6 間である。こうした違いはあるものの、境内の堂舎や石垣などの配置はかなり忠実に描かれている。このことを、次に桑実寺境内を描いた場面と現在の境内のようすを比較して確かめていこう。

図 1 は『絵巻』の当該場面について、人物と草木を除き、建物と地形を表わす部分だけをトレースしたものである。図 2 は『重要文化財桑実寺本堂修理工事報告書』（滋賀県教育委員会 1986）に掲載された桑実寺境内の概略図である。後者に描出されている建物で、『絵巻』に描かれたものと重なる建物をピックアップすると、西から（『絵巻』では左から）鐘楼、本堂、鎮守三社、そして手前に移って正寿院とその敷地にある土蔵である。建物のほかに、石段から本堂前で右に折れた石段を上がって境内奥へ続いていく通路、本堂境内と正寿院の配置、正寿院を囲む石垣など、堂塔が並ぶ敷地のレイアウトについては『絵巻』に描かれたようすがほぼそのまま現在でも見ることができる。

『絵巻』において境内の奥に描かれている三重塔は、明治 13 年の風害により倒壊し、それがあった場所は、現在は経堂が建っている敷地であろう（④）。『絵巻』に描かれた三重塔の背後には崖が迫っており、現在の経堂にもその背後には崖が迫っているのが、位置関係としては三重塔のあとに経堂が建てられたと考えられる。その経堂は大正 2 年に建てられたもので、織田信長が建立したとされる伝教大師の像を安置した大師堂が明治末年に風水害によって大破したため、大師像は代わって建てられた経堂に安置されているという。本来の大師堂がどこにあったかは調査が行き届かなかったが、『絵巻』にはまだ大師堂は描かれていないはずである。

本堂から池を隔てた東隣には鎮守三社が鎮座する。『絵



図1 『桑実寺縁起絵巻』に描かれた桑実寺（下巻第二段から製図）

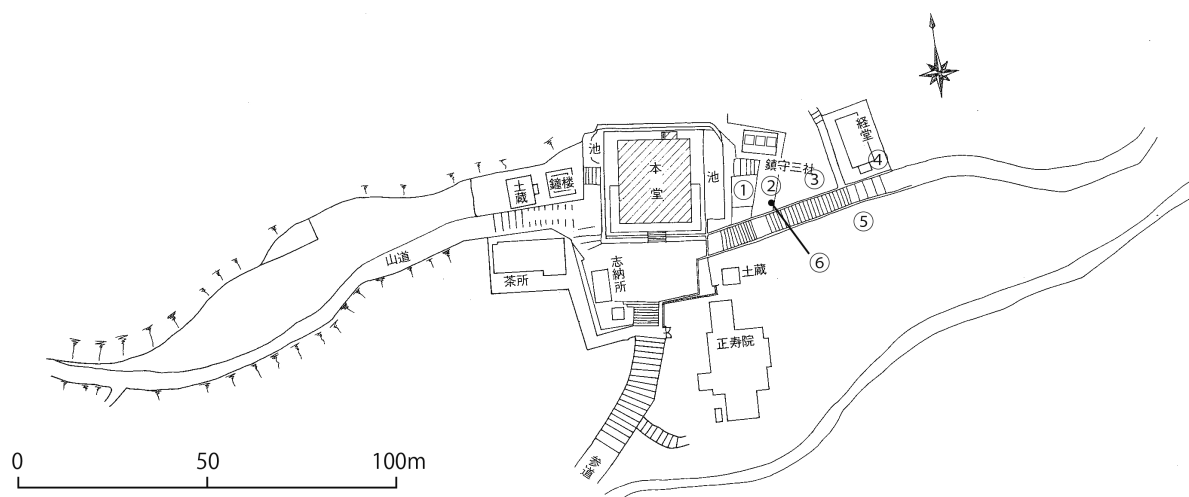


図2 現在の桑実寺境内概略図（滋賀県教育委員会1986より転載、一部改変）



図3 現在の桑実寺境内（筆者撮影）

巻』では手前2棟は柿葺き、奥の1棟は草葺きの建物が都合3棟描かれており、これらが鎮守三社であろう。草葺きの建物は屋根に千木が載っているので社殿でよいと思われる。その手前には三社の敷地への入口となる門の切妻屋根が描かれている。現境内の概略図からもわかる通り、現地のこの部分には門や、門から左に延びる堀が建つようなスペースはない。そもそも鎮守社がのる敷地から三重塔までの、石垣で土留めされた造成地のようすは、『絵巻』と現境内との間で少々異なっている。

本堂と三重塔の間にある、石垣で画された敷地のようすを『絵巻』と概略図で比較すると、現境内には本堂の東隣に雨落ち溝につながる池があるのだが、『絵巻』では本堂の陰に隠れて描出されていない。池と三重塔の間には、現境内には崖面に石垣を積んだ3段の敷地（①、②、③）があり、その中段（②）奥に鎮守三社が並んでいる。この段の石段から鎮守三社までは通路のように幅がやや狭くなっている。一方『絵巻』では2段（ii、iii）しかなく、その下段（ii）の方に鎮守三社と、その前面に3間×3間の堂舎が描かれている。石垣の高さと堂舎が占める広さからすると、概略図の②の敷地が①を飲み込んで池の際まで広がり、③は現状より幅がせまかったのが『絵巻』で示された敷地のようすと考えられる。

池と雨落ち溝は本堂背後の谷筋の水を集めて外へ排出する機能を持っているようであるから、このあたりは出水などで崩れやすく、土砂崩れによる地形改変があったのかも知れない。また余談になるが、『絵巻』に描かれた四角錐形の岩（vi）が現在も鎮守三社へ至る参道に残されている（⑥）。これは「景清の背くらべ岩」と呼ばれているらしい。『絵巻』では石垣と石段道の入り隅に置かれており、現在とは位置が異なっている。このことも災害による地形改変があったことを暗示しているかもしれない。『絵巻』には鎮守三社が建つ敷地から石段道を挟んだ向かい側にも堂舎が描かれているが（v）、現在はその位置に堂舎はないけれども、そうした建物が建てられる敷地は、笹やぶの中に残されていた（⑤）。

その他、本堂の前に描かれている門は現在では失われているが、この門の側面から正寿院の方に曲折しながら伸びている石垣は、現状でもおおむね『絵巻』に描かれたものに近い形で残されている。

以上のように、『絵巻』に描かれた、本堂を中心とする桑実寺境内の堂舎や敷地の配置は、現在のようすと若干異なる部分はあるものの、それぞれ対比できる程度に同じといえてよく、これらが配列する敷地のレイアウトは現在のようすとほぼ変わりがない。桑実寺境内の景色を見知っているものとしては、三重塔が描かれていることには違和感があるものの、『絵巻』に描かれたこの場面が桑実寺境内であると判断できるほどに、現実を忠実に描いているといえてよい（図3）。まさに、桑実寺境内を見たものにとっ

て、この場面が桑実寺を描いたものだとわかる程度に、詳しく正確に描かれているのである。

4. 『絵巻』の観音正寺伽藍と“伝三井邸跡”

では、『絵巻』の上巻第一段に描かれたもう一つの寺院はどうであろうか。亀井は、上巻第一段の詞書には桑実寺と観音正寺の由来が同等同列に扱われて言及されていることから、この寺院は桑実寺か観音正寺のどちらかであろうとしたうえで、描かれた寺院の伽藍配置は桑実寺のものとは異なることから、観音正寺を描いたものであろうと推定している。もちろん、江戸時代の直前に整備された現在の観音正寺とはまったく異なっている。筆者にはこれがどこを描出したものか、該当する寺院が思い当たらなかった。しかし、次のような考察の結果、この寺院の場面は戦国時代末期に山麓移転するまでの観音正寺の境内を描いたものとするのが妥当であると考えに至った。

寺伝によれば、山麓に避難した観音正寺本尊は江戸開幕直前の慶長2年（1597）に山上に復歸したという。現在の観音正寺境内がその復歸した場所である。現在の境内敷地は本堂の復歸と同時に造成されたと考えられるから、山麓に移転する前の中心伽藍は現在とは異なる場所にあったはずである。現在よりもっと小さい規模で同じ場所にあったと考えることも可能だが、中世山寺の遺構に一般的に見られる平坦地の配列や主要参道の配置など、そして地元に伝えられた「佐々木古城図」に記された「根元観音堂」と記された位置などを総合すると、観音寺城跡の大土塁とされていた尾根の南側直下に並ぶ大型曲輪の一つ、伝三井邸跡が、中世観音正寺中心伽藍の所在地と考えるのが妥当なのである。この点についての詳しい説明は、前稿を参照していただきたい。

この考察にもとづいて、『絵巻』に描かれた観音正寺中心伽藍のようす（図4）と伝三井邸跡のようす（図5）を比較すると、一致する部分があることに気がつく。

伝三井邸跡は背後に削り出しの大土塁をひかえ、東西両側は大土塁から派生した土塁が伸びていて隣の平坦地との境界となっている。前面は崖のように急峻に落ちているが、その中央部から縦土塁が下方に延びている。筆者が観察したところでは、これは削り出した石段道の両側が崩れて細くなったものと思われた。このような地山を削り出した石段道は、現観音正寺境内の下方、伝後藤邸跡の東側の石段道で見ることができる。そして注目されるのは、伝三井邸跡の西側辺の土塁に沿って細長い基壇を築いていることで、この段差の高くない基壇は石積みで土留めされている。伝三井邸跡の西側の境界をなす土塁は北の大土塁から南に延びて、途中で西に強く屈曲するのだが、この土塁に合わせて細長い基壇も同様に逆L字形に屈曲しているのである。

以上のような現地にみられる特徴を念頭に置いて『絵巻』

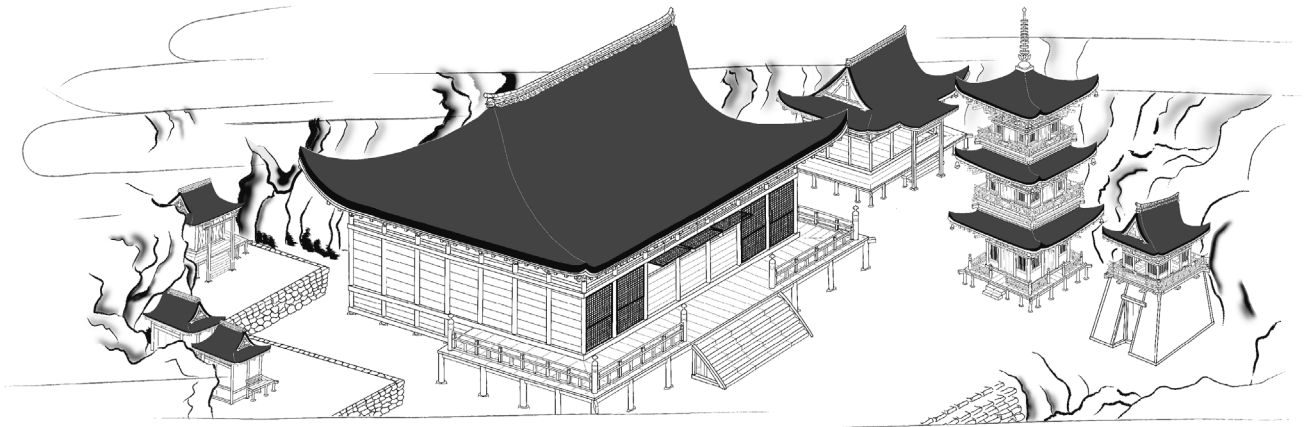


図4 『桑実寺縁起絵巻』に描かれた観音正寺（上巻第一段から製図）

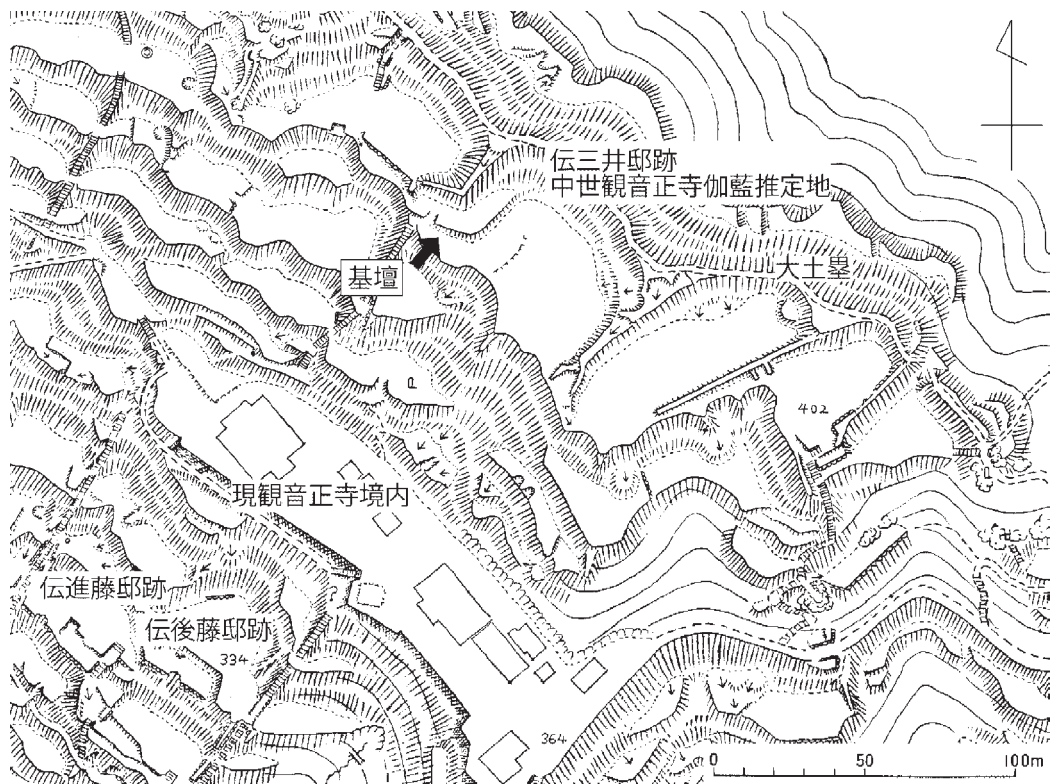


図5 観音寺城跡の伝三井邸跡（村田1991添付図より一部転載、一部改変）

に描かれた観音正寺の伽藍境内を見ると、境内背後と両側に迫っている切り立った崖、前面に急に落ちていく崖になっているようす、そしてその中央に描かれた幅広の石段道など、伝三井邸跡の地形とほぼ同じ状態が表現されている。そして、『絵巻』の絵では向かって左側辺の崖から奥の崖に沿ってL字形に曲がる基壇が作りつけられており、その基壇は石積みで土留めされている。この基壇が平面形において曲折する方向は、現地では逆L字形、『絵巻』の絵ではL字形で違っているのだが、実際はそうではない。『絵巻』に描かれた基壇は、伽藍境内の四角い敷地の、向かって左側の崖に沿って奥へ伸び、そして背後の崖に沿って直角に折れ曲がっている。そしてこの基壇の上にはおそらく鎮守社と考えられる小さな祠が、左側の崖に沿って2基、奥の崖に沿って1基、基壇の曲折に合わせて軸を直角に違って並んでいる。一方、伝三井邸跡の現地を見ると、背後にあたる奥の崖に沿う基壇は認められないが、この部分は高く削り出された奥の崖が崩れたため、奥壁に沿ってあった基壇は埋没したのだと考えられる。西側の崖に沿う細長い基壇は現地で確認することができ、それが南へ伸びたあと途中で西へほぼ直角に折れ曲がって続いている。この部分の基壇は、『絵巻』ではかすみに隠されているのであり、この描写では西へ折れ曲がった部分の基壇はあったとしても描かれていないことになる。したがって、『絵巻』に描かれた基壇と伝三井邸跡の基壇は、同じものと考えても矛盾がないことになる。

以上をまとめると、『絵巻』に描かれた観音正寺の伽藍の敷地となる平坦地を四角に区切る地形のようす、手前に落ちる石段の存在、向かって左端に作りつけられた基壇（これは鎮守社と思われる小さな祠の用地であった）の存在は、村田の縄張り図が表現しているとおりの現地のようすと一致している。とくに『絵巻』の描写と現地の基壇のようすは、L字形と逆L字形で反対になるというくい違いをみせたが、奥の崖部分の基壇は現状で埋没したと考え、手前の西へ屈曲する部分の基壇は『絵巻』の絵の描写の範囲から外れていると考えれば、この違いは少なくとも矛盾ではなく、同居可能な違いであるといえる。つまり、『絵巻』の上巻第一段に描かれた寺院は戦国時代末期の観音正寺境内であり、その場所は現在の観音寺城跡の中の伝三井邸跡と呼ばれる平坦地がそれに該当する蓋然性が高いと考える。

5. おわりに

筆者が観音寺城跡の調査を担当していた時に、村田が記録した曲輪のうち、立ち入れる範囲でほとんどの遺構（曲輪）に赴いて観察を行った。そのときの感触によれば、このように平坦地の壁面に沿って設けられた基壇のようなものは、他には確認されなかった。このように直角に屈曲する細長い基壇の存在はかなり特徴的で、平坦地の個体識別の標識になる遺構と考えてよい。戦国時代末期に観音正寺

が山麓へ移転するまでの中世観音正寺の中心伽藍のあった場所を、伝三井邸跡と呼ばれる大型の平坦地に特定するのは、以上のような検討を加え、場所を特定できる目印になるような遺構を見つけ出せたことが根拠になっている。筆者はかなり蓋然性の高い仮説であると考えているが、それでも間接的な考証であることには違いない。いつか遠い将来になるかもしれないが、この場所が発掘調査されるようなことがあれば、この推定の当否が決することになるだろう。

〔謝辞〕

本稿は、筆者がかつて在籍した滋賀県安土城郭調査研究所（のち滋賀県教育委員会文化財保護課城郭調査事務所）において史跡観音寺城跡の調査にたずさわって、そこで得た知見をもとに執筆したものである。当時の上司とデスクを並べた同僚たちから様々なご教示を得たことに感謝します。また、本文で参照した亀井若菜氏の著書のご教示いただき、伐開中の現地を視察してご指導くださった中井均氏にも心から感謝申し上げます。

註

- （1）亀井は『桑実寺縁起絵巻』の描写に関して「写实的」という言葉で評することを慎重に避けている（亀井 2003 P.101）。本稿では『絵巻』に描かれた絵が実景を描写しているという意味で「写实的」という言葉を使用する。
- （2）『桑実寺縁起絵巻』の概要については、以下の文献に拠った。中央公論社（1982）、中央公論社（1992）、亀井（2003）
- （3）亀井（2003）P.85において、辻 1985 から引用された文章。

文献（著者名・機関名五十音順、刊行年順）

- 愛東町教育委員会（2003）『百済寺遺跡分布調査報告書』愛東町教育委員会
- 伊庭 功（2010）「観音寺城と観音正寺」『研究紀要』12 滋賀県安土城郭調査研究所 のちシリーズ中世西国武士の研究3『近江六角氏』新谷和之編 戎光祥出版 2015 に収録
- 伊庭 功（2011）「観音寺城と観音正寺（2）」『紀要』第24号 財団法人滋賀県文化財保護協会 のちシリーズ中世西国武士の研究3『近江六角氏』新谷和之編 戎光祥出版 2015 に収録
- 伊庭 功（2014）「観音寺城跡の石垣—観音寺城と観音正寺（3）—」『織豊城郭』14 織豊城郭研究会
- 伊吹町教育委員会（1986）『弥高寺跡調査概報』伊吹町教育委員会
- 亀井若菜（2003）『表象としての美術、言説としての美術史 室町将軍足利義晴と土佐光茂の絵画』ブリュッケ
- 滋賀県教育委員会（1986）『重要文化財桑実寺本堂修理工事報告書』
- 中央公論社（1982）『続日本絵巻大成 13 桑実寺縁起 道成寺縁起』
- 中央公論社（1992）『続日本の絵巻 24 桑実寺縁起 道成寺縁起』
- 辻 惟雄（1985）「『真景』の系譜—中国と日本（上）」『美術史論叢』1
- 藤岡英礼（2005）「中世後期における山寺のうつりかわり」『忘れ

られた霊場をさぐる』2 栗東市教育委員会・財団法人栗東市文化体育事業団

村田修三（1977）『観音寺城の縄張』『観音寺城と佐々木六角氏』
No. 1 観音寺城跡を守る会

村田修三（1991）『観音寺城と中世城郭』『五個荘町史』第1巻 五
個荘町

栗東市教育委員会・財団法人栗東市文化体育事業団（2004）『忘れ
られた霊場をさぐる』1

栗東市教育委員会・財団法人栗東市文化体育事業団（2005）『忘れ
られた霊場をさぐる』2

栗東市教育委員会・財団法人栗東市文化体育事業団（2008）『近江

における山寺の分布』

用田政晴（2009）『湖と山をめぐる考古学』サンライズ出版

挿図典拠

図1 中央公論社（1992）より製図

図2 滋賀県教育委員会（1986）第95図を転載、一部改変

図3 筆者撮影

図4 中央公論社（1982）より製図

図5 村田1991添付図の一部分を転載、一部改変

（いば いさお：調査課 副主幹）

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage
Vol.38 2025.3

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages